

『傲慢な皇子と翡翠の花嫁』

著：秋山みち花

ill：Ciel

瑠音はため息をついて、大切な甥を抱きしめるだけだった。

しばらくして、案内の男とは別の兵が、食べ物を持って天幕に入ってくる。

「これを食べろ」

「ありがとうございます」

瑠音は礼を言って、渡された木製の盆を受け取った。

けれども、さっと料理が盛られた木皿を見て、慌てて帰りかけていた男を引き留めた。

「あの、すみません。子供がいるので、もう少し食べやすそうなものをいただけませんか？ お手数をおかけして申し訳ないのですが、小さい子には、このお肉、無理だと思うんです。本当に申し訳ないんですが」

瑠音は遠慮しつつも、飛鳥のためにやや強引に頼み込んだ。

皿の上にはいかにも硬そうな、大きな肉の塊が載っているだけだったのだ。

せめて食べやすいスープでもあればと思ったのだが、食事を運んできた男の顔は最悪になる。

「いったい、何様のつもりだ？ 平民のくせに、青覇様に拾われたことで凶に乗るな！」

激しく罵倒され、瑠音はびくりとすくんだ。

飛鳥が泣きそうになっていて、焦りを覚える。

「申し訳ありません。偉そうにするつもりはなかったのです。でも、子供には硬いお肉は無理です。それで、本当に申し訳ないのですが、他に何か」

「黙れ！」

怒鳴り声を上げた男に、瑠音はぎくりとなった。

飛鳥を抱き寄せ、どうやってこの場を切り抜ければいいのか、必死に考える。

けれども事態はさらに悪くなる一方だった。

「まったく、青覇様もどうかしておられる。こんな怪しい風体の者を野営地に引き入れられるとは。おい、おまえは何が目的でここに入り込んだ？ 言え！ 何か隠しているんだろう？」

男の怒りは別の疑念まで呼び起こしてしまったようで、あらぬ嫌疑までかけられたのだ。

男は瑠音のすぐそばまでやって来て、リュックを取り上げる。

「これはなんだ？ おかしな袋だが、何を入れている？」

「あ、それはリュックです。別におかしな物は入ってません」

瑠音は懸命に説明したが、男の疑いが晴れることはなかった。

「中身を見せろ」

「はい」

横柄に命じられ、瑠音は仕方なく飛鳥から手を離してリュックのファスナーを開けた。

男は不信感丸出しといった感じで、その様子を虎視している。

瑠音はこれ以上男を怒らせないように、慎重に中身を取り出した。

タブレットやスマホ、お茶のペットボトルなどを見て、男は驚愕する。

「な、なんだ、これは？」

「タブレットと、こっちはお茶です」

瑠音のほうも、男の反応が不思議で仕方がなかった。

そして、最後に姉の遺品の翡翠を取り出した時、男は今まで以上の怒りを見せた。

「貴様！ どうして貴様がこれを持っている？ 誰かから盗んだのか？ 正直に言え！」

「ま、待ってください。これは姉の遺品です。事故で亡くなった時に持っていたもので」

「いい加減なことを言うな！ こ、これは……この翡翠は……、いや、まさか……。だいたい、おまえみたいな奴がどうしてこんなものを？ と、とにかく、青覇様に報告しなくては！」

男は何故か蒼白になり、翡翠を持ったまま天幕を駆け出していく。

「あの翡翠がなんだっていうんだろう」

瑠音はため息交じりに呟いた。

ともかく、飛鳥に暴力を振るわれなくてよかったと安堵したけれど、今度は別の問題が持ち上がったようだ。

翡翠はもともと一片が十センチほどの立方体だったのだろう。それが斜めに、真っ二つに割れたような形だった。それでも翡翠の色は非常に美しく、その大きさからも相当な価値があると思う。

しかし、男が示した極端な反応にはそれ以上の何かがありそうだ。

姉は飛鳥の様子を聞くために毎日電話してきた。

そして興奮気味に話していたことを思い出す。

——すごいもの、見つけちゃったのよ。歴史的な価値があると思うの。ほんとにすごいんだから！

姉は趣味の範囲だが、考古学に興味を持っていた。そして姉が見つけたというのが、あの翡翠なのだろう。

亡くなった時、あの翡翠をしっかりと手に持っていたという話だったから。

「るねえ、おなかすいたー」

飛鳥にそう声をかけられて、瑠音ははっと我に返った。

「ごめんな、飛鳥。ご飯、もう少し待ってて。おじさんが戻ってきたら、もう一回飛鳥のご飯を頼んでみるから」

「うん、わかった」

何があっても飛鳥を守ると誓ったけれど、本当に不安で仕方がない。

そして瑠音は今になって唐突に、男たちが日本語を話していたことに気づかされた。

中国の大都会にいたのだ。だから、ここも中国のどこかだと思っていた。それなのに、どうして日本語が通じているのだろうか？

やはり、異世界に飛ばされてしまったのだろうか？

ひたひたと、さらに不安が押し寄せてきて、瑠音はかぶりを振った。

その時、さっと天幕の帳が開けられて、あの長身の男が姿を見せる。

「この翡翠、おまえが持っていたと聞いたが、本当か？」

美貌の男はそう問いかけながら、こちらへと歩いてきた。

「青覇様、この者が盗んだに相違ございません」

瑠音から翡翠を取り上げた男が、横から口を出す。

青覇と呼ばれた男は、うるさげに手を振って、部下を下がらせた。

そして、瑠音と飛鳥の向かい側の椅子に、さっと腰を下ろす。

「話を聞こう。この翡翠、どこで手に入れた？」

青覇は真っ直ぐに見つめてくる。

瑠音はこくりと喉を上下させて、事情を説明した。

「その翡翠は姉の形見です。この子の母親で、事故に遭って亡くなりました。発見された時手に持っていたものだそうです」

「その子供の母親が翡翠を？」

「はい」

探るような眼差しを向けられるが、嘘はついていない。

「それで？ おまえたちは何故あんな場所にいた？ 盗賊に襲われる前はどこにいた？」

「信じられないかもしれませんが、ぼくたちは突然、あの場所に立っていたのです。どこにも家が見えなくて、スマホも使えませんでした」

「スマホ？」

「はい。圏外になってて……だから仕方なく、飛鳥を連れて歩きました。途中で休憩していた時に、あの男たちがやって来たんです」

話している最中に、盗賊たちが血まみれになっていたのを思い出す。

瑠音は気分が悪くなるのを堪え、真剣に訊ねた。

「ここはどこなのでしょう？ もし中国のどこかなら、大使館に連絡を取っていただけませんか？ ぼくたちは日本からの旅行者です。パスポートもちゃんと持ってます。賑やかな通りを歩いてたんです。何かがピカッと光って、それで気がついたら何もない荒野に立ってて……」

「おまえが何を言っているのか理解できない。この野営地は黄土高原。昂国の西の外れだ。俺は崔青覇。この軍を束ねている」

「昂国……？ 崔、青覇……様？」

瑠音は小さく呟いた。

「そうだ。それが俺の名だ。そして、ここは昂国の西の外れ」

「それじゃ、ここは中国じゃないんですか？」

「先ほどからおかしなことばかり口にする。昂国は中華の大地を統べる大国だ。しかし、中国というのは知らんな」

あっさり否定されて、瑠音は泣きそうになった。

そして中国を知らないという男は、明らかに日本語をしゃべっている。

こんなおかしいことはあるはずがない。

やっぱり自分たちは、異世界に飛ばされたんだ。

ここは自分が知っている世界じゃないのだろう。

そんなおかしいことは認めたくなくて、ずっと気づかない振りをしてきた。でも、薄々わかっていたのだ。

何もかもが、今までとはあまりにも違いすぎる。

でも、気づきたくなかった。

異世界などに飛ばされて、これからいったいどうすればいいんだ？

飛鳥をどうすれば守ってやれるんだ？

のしかかる重圧で、気が遠くなりそうだった。

瑠音の不安が伝わったのか、飛鳥がぎゅっと手を握ってくる。

瑠音は青覇から小さな飛鳥へと視線を移し、無理やり頬をゆるめた。

「お兄ちゃんが一緒だからね」

安心させるように言ってやると、飛鳥が健気に頷く。

瑠音はひとつ息をついて、再び青覇へと視線を向けた。

「お願いがあります」

「なんだ？」

「ぼくたちを庇護していただけませんか？」

「どういうことだ？」

青覇は訝しげに眉根を寄せる。

「ぼくたちはこの世界で迷子になったようなのです。ぼくはともかくとしても、幼い飛鳥には助けが必要です。他に誰も知りません。ですから、どうか、飛鳥を助けてやっていただけませんか？」

瑠音は真摯に頼み込んだ。

だが、青覇から返ってきたのは、思いもしない言葉だった。

「無理だな。おまえたちには、いや、その者はまだ幼いゆえ、除外するとしても、おまえには玉璽を盗んだ疑いがかけられている。相応の処罰を与えるのが筋だ」

「玉璽を盗んだ？」

なんのことかわからず、瑠音は呆然と訊ね返した。

「おまえが所持していたこの翡翠……。これの価値を知らなかったとでも言うのか？」

青覇の口調は何故か、投げやりにも聞こえた。

だが翡翠を持ってただけで、盗んだと疑われてはたまらない。

「先ほども言いました。その翡翠はぼくの姉の遺品です。どうして盗んだなどと言えるのですか？ 翡翠なら、よく似たものが他にもあるのではないですか？」

「無惨に割れているが、これほど美しい色で、しかもこの大きさ。これは唯一無二の玉だ。それゆえ国の玉璽となった。おまえが持っているのは、これだけか？ もうひとつの割れた翡翠はど

うした？」

「もうひとつの翡翠？ そんなの知りません」

瑠音は必死に首を左右に振った。

「昨年、皇帝が弑逆された。国軍のほとんどが出払っている際に、皇城を襲って陛下を弑逆した。この翡翠はその時、持ち出されたものに相違ない。おまえが自分のものではないと言い張っても、許されることではない。玉璽を損壊した罪。盗み出した罪。それだけではなく、おまえの姉が皇帝の弑逆に関係しているなら、その罪は当然、九族に及ぶ。幼い子供とて、処罰をまぬかれることはできぬ。というわけで、おまえがいくら庇護を願っても立場は変わらない」

青覇は冷徹に言い捨てる。

話が頭に入ると同時に、瑠音は蒼白になった。

いくらなんでも、これは冤罪だ。盗んでもいないのに、疑わしいというだけで処罰の対象になるのはひどすぎる。

しかも、まだ小さい飛鳥まで！

瑠音はたまらず、青覇の前で両膝をついた。

「お、お願いします！ 助けてください！ 飛鳥だけでも、どうか、お願いします。ぼくたちは翡翠なんて盗んでません！ まして皇帝の弑逆に関係してたなんて、とんでもない話です。お願いします！ ぼくにできることなら、なんでもします。ぼくはどうなってもいい。だから、飛鳥だけはどうか、飛鳥だけは助けてください！ お願いします！」

瑠音は男の前で両手をつき、涙ながらに訴えた。

助けを求めるとしたら、この男しかない。

だから、必死に言葉を尽くした。

「本当に、なんでもします。だから、どうか、飛鳥だけは……っ！」

嗚咽交じりの声で、懸命に願っていると、冷たいオーラをまとっていた男の雰囲気、すうっとやわらぐ。

青覇は長い腕を伸ばし、瑠音の頬に触れてきた。

「そんなに甥が大事か？」

「はい、大事です。ぼくにはもう飛鳥しか肉親がないし、飛鳥も両親を喪って、親族はぼくだけになりました。ですから飛鳥のためなら、なんでもします」

「それなら、ひとつだけ方法がある」

「え？」

青覇は何故か、じっと見つめてくる。

青い瞳に呪縛されたように、視線をそらせなくなった。

青覇は何も言わず、長い時間をかけて瑠音を見ていたが、やがて、ふっと口元を綻ばせる。

「健気なものだ。いいだろう。おまえにその気があるなら、ひとつだけ逃れる方法がある」

「何を……何をすればいいですか？」

「俺のものになればいい」

何を言われたのかわからず、瑠音は首を傾げた。

「おまえが男でもかまわん。その容姿なら充分だ。おまえは俺の愛妾になれ。崔青霸の身内となれば、おいそれと罪に落とすことはできなくなる。ただの平民なら即刻死罪。いや、拷問したうえで磔か、あるいは車裂き。しかし崔家の者となれば、確たる証拠を提示しない限り、罪には問えない」

「ひどい差別ですね……。でも、ぼくをあなたの愛妾にするなどと、そんなことができるのですか？」

瑠音は眉をひそめて問い返した。

「簡単だ。おまえを抱けば、それで済む」

「そんなこと……っ」

瑠音は思わず真っ赤になった。

この男は、ただの方便ではなく、本気で自分を抱く気なのだ。

今までにも同性からアプローチを受けたことはあるが、こんなあからさまな言い方はない。それに、瑠音自身も男を好きになるという性癖は持ち合わせていなかった。

顔を赤くしたまま睨んでいると、青霸は突然、くくくっと笑い出す。

「怒った顔もなかなかだ。だが強制はしない。おまえが自分で決めろ」

青霸は突き放すように言う。

長々と迷っている暇はなかった。

理不尽な疑いをかけられて、退路は最初から断たれている。

まして瑠音はこの異世界で孤立無援。それでも、なんとしてでも飛鳥を守らなければならないのだ。

瑠音は強く青霸を睨みつけ、それからおもむろに返答した。

「そのお話、お受けします」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>